



Title	森敦『意味の変容』 「エリ・エリ・レマ・サバクタニ」論：生と死を接続できるか
Author(s)	中村, 三春
Citation	層：映像と表現, 12, 48-59
Issue Date	2020-03-10
DOI	10.14943/92300
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/76896">http://hdl.handle.net/2115/76896</a>
Type	bulletin (article)
File Information	Mori_atsushi.pdf



[Instructions for use](#)

# 森敦 『意味の変容』 「エリ・エリ・レマ・サバクタニ」 論

——生と死を接続できるか——

中村 三春

はじめに

森敦の短編集『意味の変容』は一九八四年九月に筑摩書房から刊行された。五編の短編と覚書から成っており、五編の最終章にあたるのが「エリ・エリ・レマ・サバクタニ」である<sup>1</sup>。

この短編の先駆稿は『群像』一九七四年二月号に掲載された同名の作品であり、さらに遡って一九六七年二月、同人誌『立像』第二一号に「恍惚について」と題して発表された作品が初出形となる。この作品に関しては、その間に施された内容に関わるような大きな書き換えは見当たらない。この「エリ・エリ・レマ・サバクタニ」は、他の『意味と変容』所収作品が、

内部・外部・境界をめぐる位相幾何学の近傍理論と死と生との関係について、時として図解も交えて語るなど難解な印象があるのとは異なり、比較的読みやすいようにも感じられる。具体的には、登場人物について人物本人や語り手が語る小説的な叙述によっていることから、一見、平易なように見えるが、実際には、やはり容易に理解できるものではない。また、一般に知られる森の思想・教養の範囲としては、幾何学・光学・仏教（密教、曼荼羅）・漢籍（『論語』、『聊斎志異』）などが主なところであったが、本作品の場合は聖書やイエスが取り上げられており、その意味でも異彩を放つものである。

これまでに筆者は、森敦の長編小説『われ逝くものごと

く』(『群像』一九八四・三―一九八七・二、一九八七・五、講談社)における重点として、語り手の「わたし」と作中の「優しいあの人」とが関係を結び、子を持ったとも推定されることと絡め、個人が個人でありながら、他の誰とでも交換可能な状況を作り出す「汎人称」の語りについてまとめた。また、同じく『われ逝くものごとく』の作中で触れられる「ハーメルンの笛吹き男」との関連にも触れ、夥しく続く登場人物の死の連鎖と、中世のドイツ・ハーメルンと同様に近代化から取り残された地域・庄内において、人々が困苦と宗教的な因縁に絡め取られる一種の戦後小説として、この小説をとらえてみた。<sup>3</sup>

『われ逝くものごとく』に「月山」(『季刊藝術』一九七三・七)を併せ、森の二つの代表作は、いずれも生と死との何らかの形における接続の問題に彩られている。

ここでは、これらの論の延長線上に、「エリ・エリ・レマ・サバクタニ」の読解を試み、あまり論じられることのないこの短編を中心として、森敦文芸における生と死の接続について考えてみたい。

## 1 名前の共有・伝播

短篇小说「エリ・エリ・レマ・サバクタニ」は空行により、

前後半に分かれている。前半では、かつて黒人サキソフォニストとして鳴らしたサミューエル・ジョンソン(ビル)が、今はスラム街の酒場に入り浸り、呑んだくれとなつて零落している。<sup>4</sup>この前半は、そのサミューエルことビル自身が語り手を務める。彼は名サキソフォニストで、彼が現れたお蔭でサキソフォンはジャズの代表楽器となり、彼がサキソフォンを捨てたためにサキソフォンの人気は凋落したという。だが浮浪者たちから、彼がサミューエルに似ているといわれ、サミューエル本人である彼は狼狽する。「似ているね。まるで、サミューエルが蘇つたみてえだ」。「ビルがお前のほんとの名? ビルはサミューエルのほんとの名じゃねえか」。これを聞いて彼は、イエスの末期の叫びである「エリ・エリ・レマ・サバクタニ?」(「神よ。神よ。なんぞわれを見捨て給うや」)を呟いたのち、自分が名前をあやかした「あの人」、すなわち牧師のサミューエルのことを回想する。実はサミューエル・ジョンソンの名は彼が「あの人」と呼ぶある牧師にあやかったものである。「あの人」は手でリングを二つに割ることができ、牧師らしいところが少しもなく、「街のマリアたちとも楽しげに話していた」とされ、もしかしたら黒人差別と戦っていたのかも知れないという。ちなみにこの「街のマリアたち」とは、娼婦のことを指すのだろう。「あの人」はいつしかいなくなつたが、かつてビ

ルの全盛期に手紙をくれたとされる。

ここまでが前半であり、後半はまさしく「あの人」からビルに送られた手紙の内容と見られる。こちらは手紙なので、「わたし」によつて語られている。しかし、その内容は前半よりもさらに観念的である。「わたし」はまず、芸術は絵画・詩・彫刻・音楽などの「それみずから強制力を持つところのジャンル」と、「二頁一頁めくつてもらわねばならぬジャンル」である物語とに分かたれると言ひ、「せめてひとつの物語をものし、できないまでもこの人生を反復してみたいと思つたのだ」と言ふ。しかしその物語が「朗読されて声となるとき」は逆に強制力を持つジャンルとなるとし、話は「エリ・エリ・レマ・サバクタニ？」の方へと移る。「あれは果たしてイエスの声だったのか。マリアと呼ばれる女たちの、われともなく発した心の声ではなかつたのか」。この問題は結末で再び現れるが、そこに至るまでに、まずサミューエルという名が二人を分かつ境界であること、次にナイフでリングの皮をむくことによる内部・外部・境界の成立について、さらにそこに時間軸を加え、生が「じつはたえず死によつて彫塑され、実現されようとしている」ことについて、順次語られる。そのリングの皮むきが、イエスの処刑の現場の話へと合流し、「死ぬということこそ、現実が現実であることを失つて、まっつき実現になること」をマリア

たちは知っていた、という話題で、後半、ひいてはこの小説は幕を閉じる。

この物語は、現代に生きる世俗のサキソフォニスト・ビルと古代の聖人であったイエスとの間を、元牧師のサミューエル・ジョンソンが接続するという大枠を持つている。これによつて物語の現在と、その物語がよつて立つところの理論とが結びつけられるのである。短編ながら、他の『意味の変容』所収作品と同容に凝縮された内容を持つており、単純に集約することを許さない。幾つかのポイントごとに押さえると、まず名前の共有と伝播に関わる設定がある。

「そんなに似てるかね。似てると言つてくれるのはありがたいが、ビルと呼んでもれえてえな。ビルがおれのほんとの名だから」

「ビルがお前のほんとの名？　ビルはサミューエルのほんとの名じゃねえか」

どつと哄笑が巻き起こつた。ちようど、神たちが哄笑するように。ビルと呼ばれたいなら、サミューエルになれといわんばかりである。

なんてことだ。おれはもうただのビルになるつもりだつたのに、それもできないとは。と、サミューエルは

考えた。おれはもうなにも、ものでもなくなったのではあるまいか。死とはなにも、ものでもなくなることではなく、すくなくともなんびとかにとつて、現実としてあつたものが、実現と呼ばれるところのものになることだ、とあの人は言っていた。しかし、それもただ他人様にとつてのことだけじゃねえか。こりゃあ、驚いた。

サミューエルはおどけて太い両腕を上げ、黒人特有の白いたなごころを見せながら、煤けた天井を仰いでつぶやいた。

「エリ・エリ・レマ・サバクタニ (Eli, Eli, Lanna Sabachthani) ㄨ」

言うまでもなく、イエスが十字架上で言った言葉で、「神よ。神よ。なんぞわれを見捨て給うや」との意である。

ビルは取りあえず本名と思われるが、そのビルがサキソフォニストとして名を上げた時、「サミューエル・ジョンソン」という知人の牧師の名を借りた。だが彼は、サキソフォンを捨て零落した今、浮浪者たちからサミューエルに似ていると言われ、しかもサミューエルの「ほんとの名」はビルだとも言われ、おどけて「エリ・エリ・レマ・サバクタニ？」と呟くのである。つまり、自分の名前が否定され、無化されたことにより、自分

は(神からの)保証を失って、存在の根拠を喪失した、いわば死を宣告されたと感じたというのである。名前が、受け継がれるとともに無意味化されてしまう現象が、ここで死と生の問題に接続されることにより、その名前は単なる名前としての域を越えた意味を持つようになる。ビルは自らを省み、「おれはもうなにも、ものでもなくなったのではあるまいか」と独白する。このこの意味は何だろうか。以下、本稿ではこの問題を五つのポイントに絞つて検討を加える。

第一に、名前は自己と他者との間の境界を作るような何ものである。だが、名前が物語のこのような仕儀によつていわば無意味化されることの帰結として、自己と他者との間の境界もまた無化されるものと考えられる。後半の「わたし」はこのことに関係すると思われる一節で次のように述べる。

だが、きみとわたしを分かつ境界が、このサミューエルという名であることに、感謝しなければならぬ。分かたれながらも、きみとわたしはおなじサミューエルと呼ばれるものであり、わたしはわたしのあるところ、きみもあるような喜びを持つことができるのだから。しかし、いまや境界はもっぱらわたし自身に属するところのものとなり、わたしはきみがはるかにわたしを、想い描いて

くれることを望んでいるだけかもしれない。

## 2 死による実現

第二に、死によつて何ものかが実現されるとする思想もまた、後半の最後に、イエスが処刑された後の場面についての説明で繰り返される。

考えてみると固有名とは不思議なものであり、この一節はその不思議な要素を下敷きにしている。固有名は個物を指示すると言われるのだが、実際にはほとんどの場合、同じ固有名を持つ個物は多数ある<sup>5</sup>。固有名が個物を指示するのは、個物を指すその指示の機能が他の条件によつて保証され、信じられている場合に限られると言わなければならない。仮に複数の人の名が鈴木であるような集団で、「鈴木さん」という呼び掛けは、それだけでは決して特定の個人を指示しない。指示の不透明性は、固有名においても成立する<sup>6</sup>。また、固有名が境界を作るとともに無化するという両義性は、既に論じた森の「汎通する自己」の問題や、小説におけるいわゆる「汎人称」の表現、つまり個人が唯一性を保ちながらも、個人を超えて一切衆生と共鳴する森的な世界の基層を形作るものである<sup>7</sup>。これとほぼ同じ設定は、『われ逝くものごとく』に現れる「西目のやつ」や、「われ逝くものごとく」などの呼び名において全面的に現れる。それらは、初めは特定の人物を指す仇名であったのが、いつかしら同じ属性（西目という地名の場所に住む浮浪者、〈私は死ぬもののように〉）を分かち持つ者すべてを指す符牒とされるのである。

しかし、かのマリアたちは耳をかさなかつた。彼女らは知つていたのだ。死ぬということこそ、現実が現実であることを失つて、まっつき実現になることを。したがつてまた、みずからも現実であることを失い、高次元空間へと変換して、まっつき実現になろうとするその瞬間こそ、イエスと合一することができるということ。すなわち、「エリ・エリ・レマ・サバクタニ？」とは、この合一における彼女らの恍惚の叫びでもあつたといえるであろう。

このように「わたし」は述べるのだが、ここにこそ、この短編の核心部分があるのではないだろうか。これは、彼女たちとイエスの言葉との関わりにまつわる思索にほかならない。

「エリ・エリ・レマ・サバクタニ」の言葉は、聖書の『マタイ福音書』（『マタイによる福音書』）第二十七章四六節に次の

ように現れる。

昼の十二時より地の上あまねく暗くなりて、三時に及ぶ。三時ごろイエス大声に叫びて『エリ、エリ、レマ、サバクタニ』と言ひ給ふ。わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給ひしとの意なり。そこに立つ者のうち或人々これを聞きて『彼はエリヤを呼ぶなり』と言ふ。

四福音書の中では他に、最も原初的な福音書とされる『マルコ』の第一章三四節にも現れるが、こちらは「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ」となっている。田川建三の『マルコ』註によれば、元はアラム語を「ギリシャ語綴りにしたもの」で、『マタイ』の方の「エリ・エリ」はヘブライ語化した形であるという。(なお新約聖書は基本的にギリシャ語で書かれている)。「マタイ」に「彼はエリヤを呼ぶなり」として触れられている予言者エリヤについては、この小説の前半においても、「なにも、エリアを呼ぶこたアねえさ」として触れられている。福音書では、ユダに密告され、ペテロに知らないと言われ、総督ピラトに引き渡され、処刑されたイエスは、マグダラのマリヤら女たちの前で復活する。ところが、この小説においては、この言葉を発したのはイエスではなくマリヤら女たちではな

かったかとされている。その理由は、死によって「実現」するものがあることを彼女らが知っていたためであり、むしろそれはイエスとの「合一」における彼女らの恍惚の叫びであったからだというのである。それではこの「実現」とは何を意味するのだろうか。

そこで第三のポイントとして、次のようなリングゴの果実と皮の比喩が挙げられる。

してみれば、白い果肉に属する境界は、幽明の境になぞらえてもいいではあるまいか。このリングゴの果柄に根元をあてて、次第にその先端へと伸ばしつつあるナイフの刃渡りを時間と呼ばれる一次元空間とすれば、リングゴの果柄はまさに時間と呼ばれる一次元空間が、ふたたび、戻れぬ方向をとりつつも、円環をなしてふたたび戻つて来る無限遠点となる。このようにして、境界がそれに属せざる領域として無限であるところの内部は、境界がそれに属する領域ではあるが無限遠点を持つところの外部の鏡像とされ、また同様にして外部は内部の鏡像とされるのである。したがって、わたしは生からして死を論ずることが許されるように、このように死からして生を論ずることが許されるだろう。

リングの皮をナイフでむく時、むかれた白い果肉に属する境界を幽明の境、すなわち死の世界と生の世界との境界になぞらえるとする発想は、『意味の変容』の所収短編「死者の眼」などに現れるところの、近傍幾何学と死生観とをドッキングする理論とはぼ同じである。ただし、こちらの作品がユニークなのは、その時その皮をむくナイフの刃渡りを「時間と呼ばれる一次元空間」と見なす点である。「時間と呼ばれる一次元空間」とは、時間を空間における一つの次元としてとらえるということだろう。原理上、球であるリングの表面をナイフが一周すると、そのナイフは元の位置に戻ってくるはずである。時間は不可逆的であるが、「リングの果柄はまさに時間と呼ばれる一次元空間が、ふたたび戻れぬ方向をとりつつも、円環をなしてふたたび戻って来る無限遠点となる」。「無限遠点」とは、射影幾何学において、同じ平面上の二本の平行な直線が、無限に遠いところにある一つの点で交わると考える時の、その点のことをいう。つまり、死と生とは、内部と外部との境界を隔てて対応するのみならず、そこに時間を重ね合わせることができるのであれば、死者は時間の不可逆性を超えて「無限遠点」を回って帰ってくるということになる。リングの比喩はこのように死と生の連続性・回帰性の説明とされ、またここではイエスの復活こそが、その一つの実例として取り上げられているのである。

この短編を含め、『意味の変容』全体に響いている死と生との境界（幽明の境）を隔てた写像関係、または、現実における死と生との同居状態は、森文芸の根幹をなす様式特徴である。それは村人たちの死と生に彩られた営みの物語であり、また注連寺における鉄門海上人の事績をなぞった、仏塚における生身入定の象徴的な反復を物語とする「月山」に重要な基盤を提供し、また夥しい死の物語であった『われ逝くものごとく』において、中心的な課題となるものであった。従って、『意味の変容』の掉尾を飾る「エリ・エリ・レマ・サバクタニ」、ひいては『意味の変容』の全体も、まさしくこれらの代表作と響き合うテクストと言うべきだろう。しかしながら、虚心に考えるとき、果たして死と生とは近傍理論的に接続できるものなのだろうか。あるいは、死や生とは、空間論として論じられるような何ものかなのだろうか。そして、「現実」なるものが死を契機として「実現」されるとは、どのような事態をいうのだろうか。

改めて考えてみよう。「死とはなにものでもなくなることでなく、すくなくともなんびとかにとつて、現実としてあったものが、実現と呼ばれるところのものになることだ、とあの人は言っていた」、あるいは、「彼女らは知っていたのだ。死ぬということこそ、現実が現実であることを失って、まったく実現



になることを。したがってまた、みずからも現実であることを失い、高次元空間へと変換して、まったく実現になろうとするその瞬間こそ、イエスと合一することができるということを」。死によってこそ「現実」が「実現」となり、死においてこそ自らがイエスと「合一」できるとするこれらの主張の構造そのものは、仮に先の「無限遠点」の理論を文字通りに受け入れるならば、それによって説明されるものである。しかし、リンゴの外周でナイフを一回りさせて皮をむく時、その行為によって何ものか「現実」が「実現」されたり、より「高次元空間へと変換」されると言えるのだろうか。

### 3 問いを問うということ

ここで第四のポイントとして付け加えるべきこととして、前半でビルが、「だが、問いを問うということこそ、この私が近傍の中心に矛盾として実存するということではなかったのか」と、また後半で「わたし」が、「イエスは答えなかった。イエスにとつて答えとは、問いを問うて大いなる問いに至ることではなければならぬ」と述べ、問うことをやめることは、何ものでもなくなることを意味するとされている点がある。それは、リンゴをむくことが、やはり内部・外部・境界を作り出す行為で

あり、それをやめればやはり何もものでもなくなると述べられていることにも通じる。ここで問いを問うこと、またはリンゴをむくことが、構造に対して付け加えているのは、意志・行為・力の要素にほかならない。またそれは、「エリ・エリ・レマ・サバクタニ？」が、このような実現においてイエスとの合一を求める「彼女らの恍惚の叫び」であるとすると主張とも通じるものだろう。この作品の初出が、内容はほぼそのままに「恍惚について」と題されていたことの意味もここから推測できる。なぜならば、「恍惚」や「受胎」とは、単に受動的な感覚ではなく、「問い」の姿勢の延長線上に現れるものとされているからである。そこでは、問いを問うことこそ、純粹な幾何学的構造の内部に、意志・行為・力を注入し、それによって「現実」が「実現」され、「高次元空間へと変換」することを可能とするような重要な契機であるということになる。

しかし、非情なようだが、死と生とを幾何学や空間論によって結びつけることは、現実には決してできない。生命体における生と死は、観念ではなく有機体としての実体、すなわち肉体を伴っており、それは物質的条件によって厳しく規定されている。仮説としても生身の人間は、ブラックホールの内部・外部・境界を理論的に想定することはできるが、実際にその境界を越えて内部と外部を行き来することはできない。また生命体

は、適当な物質的条件を伴わない幾何学的空間には入ることができず、逆に純粹な幾何学的空間は、物質的な世界の中に構築することができない。両者を結びつけるものは、基本的には觀念であり、形而上学的な論理であるというほかにない。死と生とを接続する形而上学は、一方では宗教の形を採り、そのテクストは聖書や仏典として結実し、福音書や（森が傾倒した）曼荼羅の形で社会に位置を占める。他方、森文芸の場合には、同じ形而上学が直接に宗教の形を採ることはなく、むしろ福音書や曼荼羅の中にある觀念を、幾何学と空間論によって抽出し、小説の形で展開することにより、同様の社会的な位置を付与しようとしたのである。それでは、「死ぬということこそ、現実が現実であることを失って、まったく實現になること」であるとは、この観点から見て、どのように理解できるのだろうか。恐らく、この命題の意味を解くことは、森敦文芸の全体像に迫る契機となるほどの課題である。ここで前提となっているのは、現実とは決して實現されえない状態、未成の中途状態であり、いかなる理想も現実においては純粹に實現することはできず、その理想が實現されるとすれば、それは死において以外にないという発想ではないだろうか。現実を永遠に不十分なものと見なし、死をも含む至高の世界への脱出をもくろむ思想は、一般にロマン主義と呼ばれるものに近づく。内部・外部・境界

をあれほど問題とし、内部と外部との写像を追究した森の思想は、現実にあつては不可能な死の領域と生の領域との全体の実現という見果てぬ理想を、この写像によって追い求めた点において、非常に独特なロマン主義の一変種と言えるかも知れない。とはいえ、それは死の讚美などのロマン主義の本筋とは異なり、「現実が現実であることを失って、まったく實現になること」を望みつつ、生の中にこそ、その写像を認めようとするものである。その意味では、柄谷行人が「エリ・エリ・レマ・サバクタニ」以外の『意味の変容』所収作品に触れて、「しかし、森敦は、それをいわば宗教なしに實現しようとしている。彼が目指すのは不死ではなく、生を生たらしめることである」と述べ、「矛盾としての実存」をそこに指摘しているのは妥当な見方と言うべきだろう<sup>10</sup>。いったい、「月山」における廃寺での無益とも思われる一冬の修行にも似た滞在は、また『われ逝くものごとく』におけるいつ果てるとも知れない無常な死の連鎖は、何を目標とし、何によって支えられていたのだろうか。恐らくそれは、死と生との完全合一、本然の境地という、現実においては決して實現することのない至高の状態へ、物語という「無限遠点」を指し示す形式によって接近しようとするが、ただし、決して実際にそこに到達することはないような営為であつたのだろう。

その点に関しては、最後の第五のポイントが重要となる。絵画・詩・彫刻・音楽などの「それみずから強制力を持つところのジャンル」に対して、後半の「わたし」が注意を払うのは、「一頁一頁めくつてもらわねばならぬジャンル」である物語の追究であり、またそれが朗読されて声になる時に生じる「強制力」であり、そしてその声は「エリ・エリ・レマ・サバクタニ？」という女たちの「恍惚の叫び」にも繋がられていた。

わたしはふと考えた。わたしは一頁一頁めくつてもらわねばならぬジャンルとして、物語なるものを考えていたが、これが朗読されて声となるとき、それはもはや変換して、それみずから強制力をもつところのジャンルになるのではあるまいか。もともと、そうした強制力を持つとうとして、文体にリズムをもたせ、メロディーをもたそうとしていたのに、さようなものを捨ててもなお強制力をもつことの可能性をさぐるうとして、考えられたところのジャンルにすぎなかったのではなからうか。

そんなことを考えるうちに、考えることすらも忘れて恍惚とし、ふと女たちの叫びを耳にして、イエスの発した声を想いだした。「エリ・エリ・レマ・サバクタニ？」あれは果たしてイエスの声だったのか。マリアと呼ばれ

る女たちの、われともなく発した心の声ではなかったのか。ともあれ、蘇りの願望と合一するとき、恍惚の叫びとなることを教えるものである。

この後、彼女らはイエスの遺骸を求めて来るが既に空しく、「だが、かのマリアたちはあの恍惚を想いだし、絶望にも似た疲労の中に、ほのかなる受胎を感じてほほ笑んだであろう。なぜなら、現実はずねに実現たろうとするように、実現はずねに現実たろうとし、かくてこそわたしはこの存在において、実存するところのものとなるのだから」という文章で、この小説は結ばれる。ここではまず、「エリ・エリ・レマ・サバクタニ？」という言葉やその声を契機として、言語としての思想が現実における実践とどのように接触するかが語られている。その接触の様態は、朗読でも黙読でも、また書くことでも読むことでも同じだろう。なぜなら、それは「われともなく発した心の声」とも言われているのだから。これは、一種の物語論・小説論であり、また（根元的発語の意味での）エクリチュールの理論でもあって、この回路が存在することによって、この小説は一種のメタフィクション（小説についての小説）としても読み換えられる。

物語を一頁一頁めくる行為は、リンゴの皮をナイフでむく行

為に相当する。つまりそれは時間的な契機を介在させ、円周を一回りして戻ってくる行為、すなわち「無限遠点」において交わるように、境界を隔てた死と生とを対応させる写像行為となるのだ。「神よ。神よ。なんぞわれを見捨て給うや」とは、そのような「無限遠点」に向けての叫びであり、その意味はほぼ、〈われ逝くものごとく〉（私は死ぬもののように）と同じとなる。このように考える時、「エリ・エリ・レマ・サバクタニ？」という言葉は、物語論・小説論の次元で機能することにもなる。それは「ハーメルンの笛吹き男」の物語のパターンを下敷きとして、夥しい死の連鎖を描き切った『われ逝くものごとく』にも通じ、それを予見する物語論・小説論の宣言にほかならない。しかも、その言葉を叫んだのがイエスではなく「マリアと呼ばれる女たち」であったとする解釈は、そのような希求が聖人や英雄のみの思想ではなく、衆生一般の態度であることを示唆する。この小説の前半では、「街のマリアたち」が娼婦を暗示する言葉とされていたことを想起しよう<sup>1)</sup>。次にそれが「恍惚」さらに「受胎」へと導くということは、その行為が精神的また生産的な帰結を生むことを述べている。その仕方によってこそ、「この存在」における「実存」はありうることとなるのである。ここにおいて、エクリチュールの理論は存在論とも合流することになる。

すなわち、森敦が行おうとしたことは、物質的条件を必須とする現実の人間には不可能な死と生との接続を、幾何学・空間論・密教曼荼羅などを駆使した独特な形而上学により、ただし宗教そのものに落ち込むことはなく、物語の形で実現することであった。それはある方向において物語や小説にできることの最も遠くまで行こうとする試みであり、だからこそ同じことを聖典の形で行った論語や聖書などと響き合うところがあつたのである。この短編「エリ・エリ・レマ・サバクタニ」は、森にとつては珍しく聖書に題材を採つた作品であるが、そのことはこのように読んでみれば、あながち偶然とは言えないだろう。

#### 注

1 単行本『意味の変容』（一九八四・九、筑摩書房）は、「寓話の実現」、「死者の眼」、「宇宙の樹」、「アルカディア」、「エリ・エリ・レマ・サバクタニ」の五章から成る「意味の変容」に、「意味の変容 覚書」が付されている。全五章はこの順に一編ずつ、『群像』一九七四（昭和五九）年一〇月号から、翌年二月号まで連載された。ただし、いづれも最も古くは昭和三〇年にまで遡る先駆形があり、それらは『森敦全集』2（一九九三・三、筑摩書房）に収録され、またそれらの発表の経緯の詳細については、同巻の森富子「解題」に述べられている。

- 2 中村三春「方法としての〈わたし〉——森敦『われ逝くものごとく』における語りの位相——」（『北海道大学文学研究紀要』一五二、二〇一七・七）。
- 3 中村三春「森敦『われ逝くものごとく』と『ハーメルンの笛吹き男』（『層 映像と表現』11、二〇一九・三）。
- 4 Samuel Johnson という名前の実在の著名人は、イギリスの作家（一七〇九〜一七八四）外、何人かいる。
- 5 「Paul」という名前の持主は多くいるにもかかわらず、「Paul」は一般名辞ではない。これは、広い多義性を持つ単称名辞である」（W・V・O・クワイン『ことばと対象』、一九六〇、大出晁・宮館恵訳、一九八四・五、勁草書房）、二二一ページ。
- 6 「確定単称名辞は、多義性あるいは the、this、that の持つ独特の機能によって、使用の場面に応じてその指示対象が移動しうる」（同書二二三ページ）。
- 7 「汎通する自己」という語句は、森の「吹雪からのたより」（『ノート B』（一九五七年一月〜一九六一年五月）に現れる。『森敦全集』1（一九九四・四、筑摩書房）所収。詳細は中村三春前掲論文（注2）を参照のこと。
- 8 『マタイ伝福音書』第二七編四五〜四七節（『旧新約聖書』、日本聖書協会、一九九二）。
- 9 田川建三「マルコ註」（『新約聖書 訳と註』1、二〇〇八・七、作

品社、四七三ページ）。同註で田川は、『マタイ』の予言者エリヤを呼んでいるという記述を「勘違い」であると推測している。また、「エリ・エリ・レマ・サバクタニ」の言葉は、聖書の『詩篇』第二二編一節に「わが神わが神なんぞ我をすてたまふや」云々とある一節の引用とされてきたが、田川は引用などではなく、「単に有名なもの言い方」ととらえている（同書四七七ページ）。

10 柄谷行人「意味の変容」論——『解説』にかえて——」（前掲『森敦全集』2）、六八八ページ。

11 『マタイ』『マルコ』『ヨハネ』の各福音書でイエスの磔刑を見守ったとされるマグダラのマリアは、俗説では一般に娼婦とされているが、本作品でそれを明示する叙述はない。ただし、前半の「街のマリアたち」は、「街の」という修飾語が「娼婦」を暗示するものと解釈できる。また、ひいては後半の「マリアと呼ばれる女たち」も、娼婦とまでは限定できないにせよ、下層の女性たちという意味合いに受け取ることができる。

〔付記〕本稿は二〇一八年二月五日、國學院大學において開催された第三回森敦研究会における「森敦『エリ・エリ・レマ・サバクタニ』論——生と死を接続できるのか——」と題する口頭発表を基にしたものである。